

編集後記

今年 1998年に発刊される J of FIA は Vol.15 となります。決して大きな研究会ではありませんが、地道に歩いて来たこの研究会の歴史の重みが肌で感じられます。これは石橋先生を初めとする先輩諸先生方の質の高いFIA研究の積み重ねによるものと感謝しております。1984年にフローインジェクション分析研究会会報 FIA、No.1とNo.2 が出されましたが、改めて 同年にJournal of FIAが出されております。編集委員長を石橋信彦先生が、今坂先生(九州大工)、与座先生(九州大理)が編集事務を担当され、フローシグナルの美しい表紙が付きました。Vol.3, No.1 には FIA 創始者 Professor Ruzicka と Professor Hansen、また Professor Stewartから本誌へメッセージも送られております。続いて1986年から与座、今任両先生が編集業務を引き継がれ、1991年Vol.8、No.1までお世話して頂きました。大変長い間、ご苦労の多い仕事に従事し、本誌の発展に寄与して頂き有り難うございました。

1992年、Vol.8、No.1.から、和田弘子先生(名工大)が編集委員長を務められ、編集委員会もできましたが、殆ど和田先生にお世話になりました。USA、Brazil、Spain、Venezuela、Portugal など外国からオリジナル論文が多く投稿されるようになり、正に J of FIA はinternational journalに成長しており、大変喜ばしいことと会員の皆様方も同じ思いをお持ちのことでしょう。1996年河鷹拓治先生(筑波大化学系)を編集委員長に選び、Vol.12、No.2から編集して頂きました。分析化学会の重職にあられながらも本誌の活性化にご尽力頂きました。Bibliographyの検索量はFIA研究者に有益な情報をもたらしてくれております。また、色々な国際会議に参加される先生方が増え、多くの紀行文が寄せられ、日本人研究者の交流が幅広く展開されていることが理解できます。Professor ChristianとProfessor Ruzicka(Univ. of Washington)がオーガナイザーを務めるICFIAは JAFIA(FIA研究懇談会)とのjoint meetingに位置付けられ本誌への外国からの理解も深まっております。この度の節目となるVol.15から私が編集委員長をおおせつかり、責任大であると感じております。Professor Christian より Vol.15へのメッセージを頂きました。また成澤先生と善木先生に総説をお願い致しました。さらに嬉しいことにたくさんの英文論文の投稿がありました。多くの先生方にはお忙しいところ、審査に貴重な時間を裂いて頂き感謝致します。先達の先生方の築いてこられた貴重な財産をさらに発展させ、質を高めていくには会員の皆様方のご協力を頂かねばなりません。宜しくお願い致します。

今年4月より河鷹研から手嶋氏が赴任してくれ、編集業務を手伝って貰っております。何分にもよろしくご指導、ご協力を頂きますようお願い致します。

編集委員会

酒井 忠雄